

4 Gregory, P.H. (1951) Ann. Appl. Biol. 38: 357~76
 5 Gregory, P. H. & O. J. Stedman (1953) Ann. Appl. Biol. 40: 651~74
 6 Hyre, R. A. (1950) Plant Dis. Repr., Suppl. 190: 14~18
 7 栗林教衛・市川久雄 (1952) 長野農試報告. 13号

8 ———・原田敏男 (1952) 長野農試報告 14号
 9 成田武四・真野豊 (1952) 北海道立農試報告, 4号: 63~96
 10 Rothamsted Rept. (1960) pp. 124~25
 11 知久武彦 (1951) 北陸病虫研報. 2号: 38~40

福井県下のウンカ・ヨコバイ類生息の地域性について

高 島 敬 一

(福井県立農事試験場)

本県のウンカ・ヨコバイ類の発生状況は、海による影響を中心として発生地域区分ができるので、各地域ごとに生息経過の特徴を吟味検討した。ご指導ご鞭撻いただいた農業技術研究所昆虫同定研究室長長谷川仁技官、当農試病虫部主任友永富博士に対し謝意を表する。

I 調査方法

調査場所 丹生郡下を海岸部（常発地帯）海岸寄山間部（常発地帯）山間部（頻発地帯）平坦部山沿（やゝ頻発地帯）平坦部（年により発生）に地域分けをし地域ごとに調査区域を1~4設定した。各区域の調査圃は、5~6月は早植田、苗代、それ以後は代表発生圃（時に2~3）とする。防除は慣行どおり。

調査時期 春期初 夏期調査は5月1日~6月30日（10日間隔）、夏秋期調査は6月30日~10月10日（10日間隔）、晚秋期調査は10月20日~12月20日（10~15日間隔）とし、ヒコバエによつた。

調査方法 対象はセジロウンカ、ヒメトビウンカ、トビイロウンカ、ツマグロヨコバイとする。地域ごとに各種平均虫数を求める。掬取25~100回往復による。

II 調査結果ならびに考察

初飛来ならびに秋季の終熄状況 [セジロウンカ] 成虫初飛来は各年5月中旬に苗代で、場所は年により異なり各地域で確認する。本邦暖地では宮崎で5月中旬早期栽培、熊本で4月下旬~5月上旬苗代、長崎で4月中下旬苗代、神奈川で5月中旬苗代等の初確認報告があるが、本県も表日本にくらべ暖地のことに早いところを除き大差はないようである。

第1表 ウンカ成虫初飛来状況

| 年次 | セジロウンカ | | トビイロウンカ | |
|-----|--------------|------------------------------|--------------|------------------------------|
| | 時 期 | 場 所 | 時 期 | 場 所 |
| 昭34 | 月 5・4 半 旬 | 山 間 部 (朝日町) | 月 7・2 半 旬 | 海 寄 山 間 部 (股下) |
| 35 | 5・3 | 平 坦 部 (") | 7・2 | 山 間 部 (朝日) 海 寄 山 間 部 (股下) |
| 36 | 5・4 | 平 坦 部 (朝日町) 海 寄 山 間 (織田町) | 7・1 | 海 寄 山 間 部 (股下) 海 岸 部 (越の) |

成虫はヒコバエで11月中は各地で認められ移動もみられるが地域間の生息量の差等は認め難い。成虫終熄期は年による差異があるが普通12月上中旬ごろ。地域差は認めない。

[トビイロウンカ] 成虫初飛来は各年7月上旬本田で場所は主として海寄地域で確認する。(石川農試予察灯傾向と同様) 暖地では前記セジロウンカよりやゝ遅れる程度で認められるが、本県ではセジロウンカにくらべかなり遅れる。本県は暖地にくらべかなり晩いようである。

第2表 ヒコバエにおけるトビイロウンカ成虫秋季生息状況 (昭36)

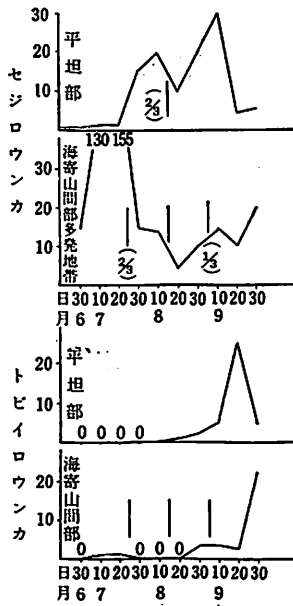
| 場 所 | 調査時期 | | |
|-----------------|--------|--------|--------|
| | 10月20日 | 10月30日 | 11月15日 |
| 山 沿 部 (朝日町) | 14 | 8 | 1 |
| 海 寄 山 間 部 (織田町) | 2 | 3 | 16 |

注 サクシヨンキャッチャーによる1a当

ヒコバエにおける成虫生息は11月上旬ごろまで各地で認められ(石川県と同様) 移動もある。第2表のとおり昭36年に10月下旬以降地形は大体同じの山際近くで海寄山間部では増加傾向、平坦山沿いでは減少傾向を認めた。これは付近の状況(地形、ヒコバエ生育状況、トビイロ生息状況)から考え成虫が海寄地域方面へ飛来するのではないかと思われる。

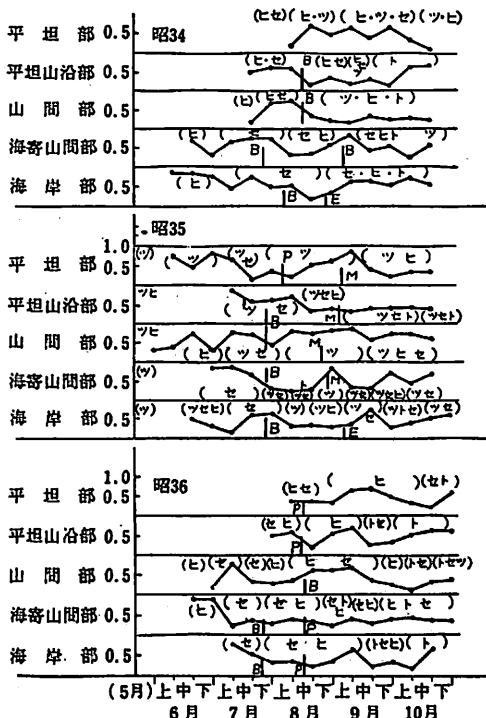
ウンカ・ヨコバイ類群集構成の動き 元村(1935)の相関法に基いた加藤(1953)の大分県のウンカ類群集の吟味その他諸種の害虫群集構成の吟味を参考に昭和34~36年の年次ごと地域別ウンカ・ヨコバイ類の群集構成の動きを検討した。

[昭和34年(トビイロ中の少発)] 5~6月は海寄部や山間部ではヒメトビの単純群集。7月に入ると海寄部ではセジロの強い安定した単純群集。その他の地域ではヒメトビ、セジロの複合群集。8月に入り平坦部ではヒメトビ、ツマグロ群集。9月中旬ごろより各地域とも3~4者の複雑な群集、1部にツマグロとかトビイロの強勢力がみられる。



第1図 ウンカ類平年発生消長(成虫)

注：・|印は防除 () 内は防除実施年数割合
・頭数は拘取25回往復分



第2図 地域別ウンカ・ヨコバイ類の隣接時期の相関係数の推移状況

注 ヒ：ヒメトビウンカ
セ：セジロウンカ
ト：トビロウンカ
ツ：ツマグロヨコバイ
：薬剤防除
BはBHC
EはEPN
Pはパラチオン
Mはマラソン

〔昭35年(ツマグロ多発, セジロ中発年)〕 5月中は広くツマグロの安定した単純群集。6月下旬~7月上旬より海寄山間部でセジロの単純群集, その他地域ではツマグロ, セジロ群集。7月下旬~8月上旬ごろよりツマグロの強い単純群集しかし海寄では複雑不安定な群集。9月下旬以降は各地域とも複雑群集。

〔昭36年(各種多発年)〕 6月中旬ごろより山間部, 海寄部でヒメトビの単純群集。7月に入り山海部, 海寄部ではセジロの単純群集。7月下旬ごろよりセジロヒメトビの複合群集。8月中下旬より平坦部ではヒメトビの単純群集。8月下旬~9月下旬より海寄部や山間部では不安定な複雑群集。

〔総括〕 1) セジロウンカが群集構成として地域的に海寄部で強く現われる。トビロウンカについても防除により明らかな結果は得られないが早期密度より同様のことがうかがわれる。

2) ツマグロヨコバイが地域的に平坦部で群集構成として強く現われる。

3) 加藤(1953), 吉目木(1960)は或種が多発する場合該種が早いテンポで構成の主を占め既構成群集をおよいかくしてしまうことを報じているが, セジロウンカが例年海寄部でまたは多発年には広域で既存のヒメトビとかツマグロまたは両種の群集構成をこわして急に単純の構成を形づくる。ツマグロヨコバイについても同多発年に早くから安定した単純群集とかヒメトビ, セジロを急におよいかくすとかがみられる。

4) 8月下旬ごろ以降は或種が多発年は別として各地域とも複雑な構成となる。

III 摘要

- 1) ウンカ・ヨコバイ類につき丹生郡下海より内陸に向け地形とから4地域に区分し生息経過を比較検討する。
- 2) セジロウンカの初飛来は5月中旬, 表日本と大体同様トビロウンカは7月上旬表日本にくらべ早い。前者は各地域で後者は海寄部で認める。
- 3) 群集構成を検討すると構成に地域性がみられ海寄部ではセジロウンカ, トビロウンカが強く, 平坦部ではツマグロヨコバイが強い。
- 4) セジロウンカ, ツマグロヨコバイの多発年, 多発地域では構成として早くから強いが, 急に強勢が現われる。

引用文献

- 1 加藤陸奥雄(1953)作物害虫学概論: 24~54
- 2 川瀬英爾, 石崎久次(1956)病虫発生予察資料56: 30~38
- 3 鯉島徳造(1956) — : 135
- 4 是石叢(—) — : 188
- 5 森常也, 樋口泰三(—) — : 193
- 6 二宮融・竹沢秀夫(—) — : 249
- 7 石崎久次, 川瀬英爾(1958)北陸病虫研会報6: 39
- 8 末永一(1959)植物防疫7: 1~2
- 9 吉目木三男(1960)植物防疫9: 383~388